

### 3、じいちゃんの宝物

「レンタサイクル、どうですかあ？」

朝っぱらから一階の店先で、父ちゃんが客に声をかけている。寝ぼけ頭で考える。ああ、そういえば、今日は土曜日だ。布団からはいでて二階の窓から港を見る。

「きた！ 観光客がたくさんきた！」

いそいで布団を折りたたんで押し入れをあけると、もうすでにコウジの布団はきれいにしまっていた。

「ちっ、起こしてくれてもいいのに」

そうはいつでも、まだ午前八時をまわったところだ。ぼくにとっては、しんじられないくらい早起きだ。

コウジは学校が休みの日でも、目覚まし時計なしで、毎朝きっかり七時に起きる。一時間、一分、一秒でも、一日のスタートに遅れをとるのがいやだという。

「どーせ、田中の家にいったんだな」

だだだっと、一階の店舗へつづく階段をかけおる。

ハルばあが内地の病院に入院してから約一カ月がすぎた。ぼくとショウちゃんはいちおう小銭をかせごうとがんばっている。コウジはまるっきり協力してくれない。

「どーせ、十円もかせげやしないさ」

コウジの言葉は、反対にぼくを発奮させた。それでも、商売は考えていたよりもたいへんだった。

はじめに、売る物にこまった。ぼくがだせる物は、ぼろぼろの漫画を数冊と、菓子のおまけのプラモデルとフィギュア、二枚もっている野球カードのうち一枚だ。

ショウちゃんは、ずっとあつめていたという王冠を箱にたくさんもってきた。王冠は酒のびんについているふたで、赤や白、黒に金色などかっこいいものもあった。

けれども、小学校の教室で商売をしようとしたら、担任の先生に注意された。しかたなく観光客に売ることにしたのだけれど、まったく相手にしてもらえなかった。

「今日こそ、なんとかしなくちゃな」

ハルばあの巾着のなかみは四十円のままだ。

よく考えると、この四十円は、ぼくがカワハギのからあげに払った四十円だ。つまりハルばあがかせいだ金だ。ということは、ぼくらはまだ一円すらかせげてない。

「おはよう、あれっ、母ちゃんは？」

一階は住居けん店舗だ。

「しらす工場だよ」

父ちゃんは五、六人のグループに自転車を貸しだすと、店内にもどってきた。

「土曜日なのに？」

「しらすの大漁で、およびだしたよ」

「時給七百円かぁ」

母ちゃんは日間賀島のしらすの加工工場ではたらいしている。なまのしらすを湯がいて干して、しらす干しを作る工場だ。ショウちゃんの母さんもいっしょだ。

「まてよ、休日出勤だと時給がアップするんだったな。八百円くらいかなあ？」

「うん、まあ、そんなところだなあ」

父ちゃんは店先で自転車のパンクの修理をはじめた。ぼくは父ちゃんのとなりにしゃがむ。

「ねえ、大人は金がかせげていいね」

金のことばかり口にするのと、父ちゃんが手をとめた。

「ハルさん、全治三カ月のケガだってな。内地の総合病院に入院したんじゃあ、けっこう金がかかるな」

父ちゃんも島のみんなも、ハルばあが骨折して入院したことを知っている。そして、ハルばあが砂浜で転んだことに、ぼくら三人組がかかわっていることも。

父ちゃんは、ハルばあが元気になったらすぐに商売に復帰できるようにと、ネコ車のタイヤを取りかえてくれた。それから、車体にサビ止めをぬってくれた。

父ちゃんは汗をふくと、自転車にむきなおった。長い桶にはった水にタイヤをつけ、空気のもれをしらべる。ぷくぷくと小さな泡が出るところが、タイヤのパンクしているところだ。

「ねえ、さっきのお客さんは五人？」

「六人だよ」

安井レンタサイクル店では、二時間あたり五百円で自転車をかしている。たいていの人は二時間以内に自転車を返すので、今朝の売上は三千円だろう。

その他の収入は、島の住人の足である自転車と原付バイクの修理だ。いちおう販売もしているが店に商品をならべてない。カタログで注文を受け付け、父ちゃんが内地へ買いに行く。

そして、手数料をうけとる。しかし、ここ数年、父ちゃんが代行で内地へ商品を買いにいったことはない。みんなインターネットで注文するようになったからだ。

「ねえねえ、ずっと前からきになっていたんだけどさ、父ちゃんのかせぎと母ちゃんのかせぎと、どっちが……」

ぼくがみなまでいわないうちに、

ピューッ！

顔面に水がとんできた。

「うひゃあ！」

どうやら、きいてはいけないことみたいだ。

「くっちゃべってないで、パンでも食べるよ」

父ちゃんはじいちゃんの家で生まれ育って、高校進学と同時に島をでた。内地でそのまま就職して、母ちゃんと結婚するときに島にもどってきた。

ショウちゃんの父さんもまったく同じだ。内地でおくさんを見つけて、やはり日間賀島へかえってきた。二人とも実家の漁師の仕事をついでない。

ぼくは食パンをくわえて冷蔵庫から牛乳パックをとりだして、また店先にいく。

「父ちゃん、サラリーマンはたのしかった？」

「ま、まあな」

少しこまったふうに、父ちゃんは笑った。

「ふうん、今の仕事と、どっちがたのしい？」

「くらべるまでもない。今にきまっているさ」

父ちゃんは自転車をもちあげて、修理台からはずした。水でぬれたタイヤを雑巾でふく。父ちゃんは修理の名人だ。うごかなくなった原付バイクもなおしてしまう。

修理した自転車を店の前にうごかして、父ちゃんは店先のいすに腰をおろした。これからまた、うちわで顔をあおぎながら観光客がやってくるのをまつ。

父ちゃんは仕事をしている時間よりも、観光客をまっている時間の方がはるかに長い。

「時給だと、客がこなくても、時間がすぎれば金をもらえるんだよね。父ちゃんも、時給だったらよかったのに」

返事のかわりに、父ちゃんは頭をかいた。

「とはいっても、工場の仕事はたいへんだ。立ちっぱなしでトイレに行く時間もないらしいぞ。ほら、富田のかみさんはぼうこう炎になっただろう」

父ちゃんは立ちあがって、魚をさがすクマみたいに店先をうろうろしはじめた。

以前、ショウちゃんが、母さんがおしこの病気になったといっていた。内地の病院にかかって、フェリー代と診察代で数日分の給料がとんでいったそうさ。

「もしかして、父ちゃん、することがないの？」

「そんなことない」

「ぼくが島中の原付バイクをパンクさせてきてあげようか？ そうすれば、父ちゃんもトイレに行く時間がな……」

またしても、ぼくがみなまでいわないうちに、

ビシャーッ！

ホースの水がとんできた。

「ジョーダンだよ」

運動靴に足をつっこんで、店をとびだす。

「冗談でも、そんなことをいうんじゃない！」

父ちゃんの声がおいかけてくる。

「ごめんって……」

と、西港に高速船が入ってきた。

建物のかげで休んでいたネコ車ばあちゃんたちが、島におりたばかりの観光客になにか買ってもらおうとうごきだす。ネコ車どうしがぶつかりそうになる。

「あぶにゃあがね」

「あんたはあっちいってちょー」

普段は仲良くおしゃべりしているのに、商売となると、みんな目の玉をぎらぎらさせる。

「客のとりあい、すげえなあ……、あれっ？」

ネコ車ばあちゃんたちの中に、どういうわけか、ショウちゃんがいた。古臭い深緑色の風呂敷包みを背負っている。ぼくはショウちゃんにかけよった。「ショウちゃん、おはよう。西港でなにやってるの？ ビーチの方で商売しないの？」

今から家によびにいこうと思っていた。

「おはよう、スケっち。今日は、おばあちゃんたちみたいに、場所を工夫しながら売ってまない？」

ぼくらはこれまで、サンセットビーチに青いビニールシートをひろげて、てきとうに商品をならべていた。人のいないあいだは商品の漫画をよんだり、ゴムボールで遊んだ。

ネコ車ばあちゃんたちは、金をかせぐため客をうばいあう。ぼくらも少しは見習わないといけないのかな。ショウちゃんは船着き場のちかくに、小さなシートをひろげた。

「ここなら、おばあちゃんたちのじゃまにならないし、船からおりた観光客に見える」

「よし、売ろう！」

ぼくはわくわくしてきた。

週末だし場所をかえたし、今日こそは、なにか一つくらい売れるかもしれない。はじめて金をかせげるかも。おまけに、ショウちゃんはじゃじゃーんと新商品をだした。

「父さんが子どもの頃にあつめていた牛乳びんのキャップだ。ゆずってくれたんだよ」

「へえ、紙なんだ」

ぼくはまるいキャップをつまんだ。

紙はぶあつくてしっかりしている。ひっぱるところなのか、タコ焼きにさしたつまようじみたいに、ぴよっと紙がでてくる。色は青に赤に黄色、いろいろある。

「牛乳びん入りの牛乳って、コンビニで見たことあるけど、紙パックよりもうまそうだよなあ」

ショウちゃんはキャップをならべながら、つばを飲みこむ。ぼくは風でキャップがとばされないように、王冠をのせていく。もくもくと作業をしていたときだ。

「なつかしいなあ」

頭の上から声がきこえた。

顔をあげると、旅行カバンを肩にかけたおじさんが牛乳キャップをながめていた。ぼくとショウちゃんは顔を見あわせた。チャンスだ。金もうけのチャンスだ。

「い、いらっしやいませ！」

なんとか声にだせたけれど、うまい言葉がつづかない。そういえば、牛乳キャップの値段をきめてなかった。ショウちゃんのわき腹をつつく。

「いくらにする？」

小声でたずねる。ショウちゃんはぼくに答えるふうに、おじさんにいった。

「どれでも、一個十円です」

おじさんはぽかーんと口をあけた。それから、眉をぎゅっとよせて、かわいそうな子どもでも見るように、ぼくとショウちゃんを交互にながめた。

「きみたちは、ここで商売をしてるの？ おうちの人はこのことをしてるのかい？」

「はい、いちおう」

ぼくらとおじさんのやりとりを、観光客がふしぎそうにながめている。ぼくはわるいことをしてないのに、教室のうしろに立たされているような気持ちになった。

買わないのなら、早くどっかにいってくれよ。のどまででかかった言葉を飲みこむ。このおじさんは、ぼくらが生活にこまって商売をしていると思っているのだ。

ぼくははずかしくてうつむいた。ところが、ショウちゃんはちがっていた。

「お客さん、ひやかしならかえってください」

けろりと、笑顔でいってのけた。

すると、またしても、おじさんはぽかーんと口をあけた。それから、うすっぺらな額をたたいて、こりゃあ一本とられたわいと笑いはじめた。

「夏休みの自由研究の一環かな？ まあ、がんばりなさい。商売はそんなに甘くないぞ。おじさん、なつかしいものを見せてもらって得しちゃったな」

おじさんは勝手にかんちがいして、勝手にごきげんになって立ち去ってしまった。

「なんなんだよ、あのおっさん。ってかさ、夏休みなんて、とっくにおわってるし」

おじさんがいなくなってから文句をいう。

「まあまあ、いろんなお客さんがいるから、いちいち腹を立てていたらきりないよ」

ショウちゃんはどうしない。きっと家の手伝いで、店番をしているおかげだろう。

「ショウちゃん、トラックの運転手よりも、酒屋の方がむいているんじゃないの？」

心からでた言葉だった。

「えへへ、ありがとうね。でも、酒屋のあとをつぐのなら、日間賀島にもどってきてからでもおそくないからさ」

「んっ？ ああ」

満面の笑顔に、言葉につまる。

いったん日間賀島をでていってかえってくるころまで、ショウちゃんは考えているのだ。

「らっしやいらっしやい、どれでも十円だよ」

大きな声をだすショウちゃんの横顔を、ちらっとぬすみ見る。ぼくをのこ

して、シヨウちゃんだけ大人になったみたいだ。なんだか胸のおくがざわざわする。

ぼくは自分の将来の姿をじょうずに想像できない。日間賀島をでていくことだけでも、すごく勇気のいることなのに、もどってくるところまで考えられない。

「ほら、スケっちも元気だして、声だして！」

「お、おうよ！」

ぼくのひきつった笑顔のせいだろうか。かんちがいおじさんが立ち去ったあと、写真をとっていく観光客はいても、足を止めてくれる人はだれもいなかった。

けっきょく、ぼくらは十円どころか一円もかせげなかった。

次の日の日曜日もおほみたいに晴れた。

ぼくはコウジよりも早く起きて、ザコをわけてもらうため、じいちゃんの家へむかった。今のぼくらの手持ちの商品だけでは金をかせげそうもないからだ。

じいちゃんは外がまっ暗なうちから海にでて、前日にしかけておいた網をひく。そのまま内地の港によって、とれた魚を市場におろして島にもどってくる。

「じいちゃん、いる？」

庭先にまわりこんで声をかける。

「おお、めずらしいのう」

ひと仕事おえたじいちゃんは、酒もりのさいちゅうだった。もうだいぶ顔が赤い。

「コウスケ、一人かい？」

じいちゃんは庭先を見回した。

「う、うん……」

コウジがいた方が、じいちゃんはうれしいのかな？ ちょっとうつむくと、じいちゃんは明るく声をかけてくれた。

「ちょうどいいところにきたな。今朝は大漁じゃ。ほれ、あがって食うていけ、食うていけ」

じいちゃんはひょいっと座布団を投げる。ぼくは靴をぬいで縁側をよじのぼった。

「食べる、食べる！ でも、じいちゃん、なんで、このヒラメを売らなかったの？」

ちゃぶ台のまん中に、枕くらいでかいヒラメの姿作りがある。市場では大きなサイズの魚ほどいい値がつくという。きっと高く売れたにちがいない。

逆に、小魚には値がつかない。だから、漁師たちは自分の家で食べるために、小魚をバケツに入れてもってかえる。ネコ車ばあちゃんはこのザコを安く手に入れて土産物を作るのだ。

首をかしげるぼくに、

「そりゃあ、わしが食いたかったからじゃ」

あっけらかんと、じいちゃんはいうと、ぶあついヒラメの刺身にしょうゆとわさびをつけて口の中にほうりこんだ。うーんと目をして、ヒラメを

味わっている。

「うまそう……」

ぼくは座布団にすわって、はしをにぎった。ああ、まよってしまう。刺身だけではなく、大あさりのしょうゆ焼きにゆでたわたりガニ、エビフライもある。

「えんりょせんでええ。食いたいもんから、食うたらええ。足らんなら、海にでてどっさりとってきてやる」

じいちゃんは笑った。

「それじゃ」

ぼくもぶあついヒラメの刺身にしょうゆをつけて、口の中におしこむ。身はぷりぷりしていて、かめばかむほど甘い。うまいと叫ぶかわりに、何度もうなずく。

「こんなにうめえもんを売っちまうなんて、もったいねえ。わしはさきに自分の食いたい魚をよけて、のこりを金にかえることにしておるんじゃ」

そうはいても、

「このヒラメ、売ると、いくらになるの？」

やっぱり、ぼくは気になった。

「なんじゃ、コウスケ、今日はコウジみたいなことをいって。おまえも、このさき漁業ではもうからんと、わしに説教するんじゃあるまいのう？」

「はいっ？」

じいちゃんとコウジは二人きりのとき、そんなこむずかしいはなしをしていたの？ ぼくはてっきり、コウジだけ小遣いでももらっているのだと思っていた。

「コウジにはかなわんわい」

じいちゃんはきゅっと酒を飲んだ。

「毎月の売り上げから、漁業組合に払う金、船の燃料費、その他もろもろを差し引いて、純利益を計算するんじゃ。わしはテストの採点をされているきぶんじゃ」

「あいつ、そんなこと……」

ぼくはハッとした。

コウジは漁師という職業についても、あれこれ考えているにちがいない。漁師になったら、毎月いくらかせげるか。計算機で一元単位まではじきだしているのだろう。

「子どものくせに金の心配などせんでええ」

じいちゃんはそういったけれど、ぼくはうなずけなかった。あんまり子ども扱いされるのはいやだ。それでも、今のぼくには、子どもっぽい夢しかない。

また胸のおくでざわざわと音がきこえてきそう、わたりガニをつかんで足を引きちぎった。指をつっこんでこうらをはがし、ゆで汁といっしょに身をすする。

「めちゃくちゃうまいね！」

「食べ食べ、みんな食べ！」

じいちゃんは酔っぱらってごきげんだ。

「おやっ？ とってきたタコがないぞ。さては、ばあさん、ゆでタコを鍋にわすれておるな」

じいちゃんは立ちあがって、台所へむかった。

「ばあちゃんは、どこ？」

そういえば、家のどこにも、ばあちゃんのけはいがない。庭先にもいなかった。

「ばあさんは植松へ野菜を買いにいったきりかえってこん。会議のまっさいちゅうじゃろう」

ばあちゃんの好きな会議とは、近所の人があつまってくっちゃべる井戸端会議のことだ。

「議題は、入院しておるハルばあのことかろう。治療費がバカ高くつかないとええんじゃが」

じいちゃんも、父ちゃんと同じことをいった。ゆでタコを手にはぶらさげてもどってくる。

「そうじゃった、コウスケ、おまえたちの商売とやらはうまくいっておるんかい？」

「んっ、ごほっ」

ぼくはエビフライをのどにつまらせた。せまい島で、かくしごととはできない。じいちゃんも、ぼくらがハルばあに巾着袋をおしつけられたのを知っている。

「まあまあだよ」

ぼくがうそをつくとき、

「ふっ、ははは」

じいちゃんはタコの足をひきちぎって、ぼくに投げた。空中で足をキャッチする。

これまたみごとなサイズのタコだ。百円玉くらいの吸盤がびっしりとついている。足一本でも、腹がふくれそうだ。タコの頭は赤いメロンみだ。

やっぱり考えずにはいられない。

「このタコ、干物にすれば一万円はするだろうな。なんていったってタコだもん！」

日間賀島では、魚よりもイカよりも、名物タコの姿干しが、土産物の中で一番にんきだ。タコにかぎっては小さなサイズでも、そこそこの値がつくという。

ましてや、こんなにも大きなタコだ。いくら自分が食べたいからといっても、ぼくでもぜったい市場で売る。そこまで考えて、すぐさま自信がなくなった。

ぜったい？ どうだろう。ゆでタコに鼻をちかづける。タコのおいと、潮のおいがまじりあう。海のおいだ。うわぁ、うまそうだ。がまんできない。

「やっぱ食べちゃおう」

ぼくはタコの足に食らいついた。ぷちぷちと音を立てて吸盤をかみくだく。やわらかな餅のような身をかみしめる。あぁ、しあわせだな。顔がにやけてしまう。



「わしも食べちゃおう」

じいちゃんもタコにかじりつく。

二人してもぐもぐ口をうごかしながら、声をだして笑いたいのをこらえる。

タコを飲みこみながら、ふと思った。じいちゃんは金のためだけに仕事をしているのではないのかもしれない。大好きな海に出て大好きな魚をとる。

父ちゃんも同じかもしれないな。大好きなしお風にふかれながら大好きな自転車をいじる。じゃあ、母ちゃんはどうなのかな？ 今度きいてみよう。

「コウスケ、おまえはわしによようにておるな。大金持ちにはなれんじやろうが、まあなんとか生きていけるわい」

「そ、そうかなあ……」

じいちゃんはどんとタコをテーブルにおいて、しわくちゃの笑顔をぼくにむけた。

ほめてくれたのかな？

ちょっとちがうような気もするけれど、なんだかてれくさい。顔だけではなく、性格をにてるといわれて、いつもよりじいちゃんのことをちかくに感じた。

「おっと、コウスケ、わすれておった。おまえにもいいもんを見せてやろう」

じいちゃんはそう言って立ちあがると、タンスの小さな引き出しをあけた。ごそごと中をあさってなにかを取り出すと、日焼けした手のひらにのせた。

「なんだかわかるか？」

「あっ、記念硬貨だ！」

「大正解じゃ」

じいちゃんはとくいげにつづける。

「網にかかったんじゃ」

「網って。まさかこの硬貨、海でとったの？」

「またまた、大正解！」

じいちゃんはうなずく。

「さわっても、いい？」

じいちゃんの返事をまてずに、記念硬貨を手にとった。ふつうの五百円玉よりすこし重い。りんかくもごつごつしていて、まるで銀色のメダルのようなだ。

硬貨の表面を日にかざしてみると、五百円という小さな文字と空港と飛行機のもようが見えた。飛行機はつばさをひろげて大空にとびたつところだ。

「コウスケ、これをやるといったら、おまえならどうする？」

「どうするって？」

ぼくがききかえすと、じいちゃんはにやりとした。

「この硬貨は、ふつうの五百円と同じように植松で買い物ができるぞ。コウジがいうには、内地の記念硬貨買とりセンターへもっていけば、千円ほどで売れるそうじゃ」

じいちゃんは手のひらであごをなでながら、ぼくの返答をまっている。でも、ぼくの答えはきまっていた。

「こんなにかっこいい硬貨を、植松で使えるわけがないじゃん。千円でも売りたくないなあ。だけど、じいちゃんは、ぼくにくれるなんて、いわないさ」

「いやっはっはっ。ばれてしもうたかい。これは、わしの宝物なんじゃ。海で網にかかった物は、わしの物。わしの目が黒いうちはだれにもゆずれんな」

ぼくは、じいちゃんの手ひらに五百円を返した。記念硬貨はがんばっている自分へのごほうびみたいだ。ハルばあが記念硬貨をほしがった気持ちがちょっとだけわかった。

「コウスケ、やっぱり、おまえは、わしによようにておるわい」

じいちゃんは記念硬貨をタンスのおくにしまった。

## 4、ぼくのできること

ぼくは両手に、ザコの入ったバケツをぶらさげている。バケツのとってが手のひらに食い込む。じいちゃんが特別にわけてくれたでっかいアナゴがうごいている。

あわよくば、ばあちゃんにザコをさばいてほしかったけど、会議が長引いているようでかえってきそうもなかった。家にもどって母ちゃんにお願いした方が早い。

「これ多すぎるよ」

酔っぱらったじいちゃんは、もういいといっているのに、ぽんぽんバケツに魚をほうりこんだ。

海岸沿いを歩いていくと、釣り竿を背負った観光客らしきお兄さんと出くわした。

「おっ、大漁だな、うらやましいな」

お兄さんはぼくのバケツをのぞきこんだ。肩にさげているクーラーボックスは軽そうだ。お兄さんは指でアナゴをつついた。干物にしなくても売れるかもしれない。

「あ、あのう……」

「ん、なんだい？」

お兄さんと目があう。いくらにしようか。アナゴの干物は大きさにもよるけど、だいたい五百円から千円だ。生きている方が高いのかな？ 安いのかな？

ぼくが考えていると、

「かば焼きにしたらうまそうだな。白焼きもいいな。ああ、お茶漬けもうまいよなあ」

お兄さんはアナゴを見つめたまま口もとをぬぐった。アナゴは殺気を感じたのか、うねうねとはげしくうごいた。バケツからとびだしそうになアナゴを、お兄さんがおさえた。

「おおっとと、もっとおくの方に入れておかないと、アナゴがとんでいっちゃう！」

お兄さんは片手でアナゴの頭をおさえて、あたふたしている。ぼくは笑えてきた。バケツにはザコが傷まないように氷水が入っているので、生きているアナゴをおしこめない。

それに、いくらいきがよくてもアナゴは空をとばない。バケツからとびだしたって道路でくねくねしているだけだ。それなのに、お兄さんは逃がさないように必死だ。

「つ、つめたい！」

「もしかして、兄ちゃん、ぼうず？」

ぼうずとは、魚が一匹も釣れないことだ。

「う、うるさい。これから、でかいヒラメを釣るのさ。クーラーボックスに空きがないと困るだろう？」

どうやら凶星みたいだ。

ぼくは自分の腹を見た。ヒラメ、うまかったな。もう消化しちゃったかな。ヒラメが胃袋の中で溶けていくところを想像したらますますおかしくなってきた。

「もう、あげるよ」

しぜんと口から言葉がこぼれた。

「はっ？ えっ？」

「アナゴ、兄ちゃんにあげる。かば焼きにでも白焼きにでも、なんでもして。もってけ、ドロボーだ！」

「いいのか？ なんだかわるいなあ」

そうはいつでも、お兄さんのうごきはすばやかかった。クーラーボックスをあけてアナゴを移す。

「ありがとよ、日間賀島サイコー！」

お兄さんは手をふって、港の方へと歩きだした。ったく、調子がいいんだから。

「兄ちゃん、また遊びにきてよね！」

日間賀島をサイコーといわれて、いいきぶんだ。ぼくも両手をふりかえす。けっきょく金にはならなかったけど、あんなによろこんでくれたんだから、まあいいか。

足もとのバケツをもちあげたときだ。

「だらしにゃあなあ。なーにが、もってけドロボーだぎゃあ。ドロボーならつかまえんと」

きこえるはずのない声がした。

こわごわと顔をあげると、ゆるやかなカーブの道の先に、ハルばあがっ立っていた。

「なにしているのさ？」

ハルばあの左右に、風呂敷包みをかかえたショウちゃんと紙袋をさげたコウジもいる。

「そいつはこっちのせりふだわ。売れるときに、ぱーっと売ってしまわにゃ。客にただで魚をやってまったら、ぜにはふえねえ。だまって見てりゃあ、バカでねえの」

全治三ヶ月のはずのハルばあがかみつくように、ぼくをまくしたてる。両脇に松葉づえをはさんでいなければ、ケガ人とは思えないほど元気だ。

ショウちゃんが口ぱくで、単語をならべてくれる。ミナト、ニモツ、イエ、ハコブ。つまり港から荷物をハルばあの家に運ばされているようだ。

それでも、わけがわからない。なんで、こんなに短期間で、ハルばあは島にもどってこれたんだ？ それに、ショウちゃんはともかく、コウジがハルばあを手伝うなんて。

「どういうことなの？」

ぼくのとまどいなど、ハルばあはまってくれない。

「ほうれ、巾着を見せてみい。どのくれえかせげた？ いっぺえになったか？」

ハルばあはうんしょうんしょと、松葉づえでぼくの前にやってきた。まだ松葉づえをうまく使えないみたいだ。ぼくはポケットから巾着をとりだした。

「それが、そのお……」

四十円のままだ。

ハルばあはぺちゃんこの巾着袋を見て、一瞬かたまった。どやされるかと思ったら、

「きゃーっはっはー！」

ハルばあは大笑いした。

耳もとで巾着をゆらして、すぐにぼくらが一円もかせげていないことにきがついた。

「一カ月もあったのに一円もかせげんとは情けにゃあもう。おかしすぎて、なみだができる」

怒られるよりも、笑われた方がくやしかった。ハルばあにできることが、ぼくにはできない。心のどこかで、巾着一つ分の小銭にくらいなんとかなると思っていたのに。

「おばあちゃん、いろいろとわけがあるんだよ。学校では商売してはいけないって、先生に注意されちゃったしさ。平日だと、観光客はあんまりいないしさ」

ショウちゃんはハルばあのとなりに歩みよる。

「それに、先月末からは、月水金は授業がおわったあとに、秋の運動会の練習がはじまったんだよ。だから、週末の土日にしか、商売ができなかったんだよ」

ショウちゃんが一生懸命ならべたいいわけを、ハルばあは鼻息で吹きとばした。

「ふんっ。巾着一つなら週末だけでじゅうぶんだがね」

ショウちゃんは苦笑いをうかべたけど、負けず嫌いのぼくのハートに火がつく。

「ああ、じゅうぶんだ」

ハルばあの手から巾着をひったくる。こうなったら、なにがなんでも、巾着一つかせいでやろうじゃないか。だいたい今までは商品がわるかった。

ぼくのガラクタやショウちゃんの王冠や牛乳びんのふたなんて売れるはずない。島にきた観光客がほしがるとは、日間賀島ならではのお土産物だ。

どうしてきがつかなかったのだろうか？ 立ち話している時間すらもったいない。

「ぼく、いそぐからさ」

「こりゃあ、どこへいくんだぎゃ。わしの家はこっちだがね。おみゃーもついてこい。それとも、なにかい、母ちゃんにそのザコをさばいてまって、干物でもこしらえてもらうのきゃあ？」

「いや、ち、ちがうよ」

ぼくのこんたんはハルばあに見ぬかれていた。

「母ちゃんにこしらえてまったら自分でかせいだとはいえねえ。わしが手ほどきしてやるで。いつも食べるばかりじゃのうて、いっぺん作ってみたらどうよ」

ハルばあのことばは、正しいことにきこえた。ぼくがまよっていると、

「母ちゃんなら寝てる」

コウジがのろのろと日かげからでてきた。紙袋を頭にのせて日よけにしている。

「ああ、そういえば……」

昨日、休日出勤の母ちゃんは残業もしてきた。かえったときには疲れはてていた。コウジは母ちゃんに、ハルばあをむかえに行くようたのまれたのだろう。

母ちゃんはハルばあびいきだ。フェリーに乗って、内地の総合病院へも見舞いにいった。いくら、じいちゃんの親友のおくさんといってもしんじられない。

「まだ店番の方がましだ」

コウジはぶつぶつ文句をいう。

「もたもたしてると、せっかくのザコが傷むでよ」

「ちえっ、もう、わかったよ。いけばいいんだろう。なんでいつもこうなるんだよ」

ぼくはしぶしぶ、ハルばあ一行に加わった。

「うわあ！ スケッチ、やるじゃん。このザコ、おじいちゃんからわけてもらったんだね！」

「うん、ただでゲットさ」

ショウちゃんにほめられて、ちょっと胸をはる。じいちゃんはもともと、ハルばあに無料でザコをあげていた。もちろん、ぼくからも金をとらなかった。

「やっぱり、海ってすごいな。商品の魚がただでとりほうだいだもんなあ」

ショウちゃんが感心したふうに、海をながめた。すると、すぐさまコウジが反論した。

「ただでとりほうだいじゃないよ。組合から漁業権を購入しないといけないし、漁業にもちゃんとルールがある。魚の種類によっては禁漁期間もあるんだぜ」

「そんなことしってる」

コウジとはなすとしらせる。

漁業権とは、魚をとってもいいという免許だと、学校の授業で教わった。ショウちゃんもわかっているけど、コウジのように細かく計算してないだけだ。

「コウちゃんは、シビアだね。でも、商売って、そのくらいじゃないとダメなんだろうな」

ショウちゃんはコウジに感心している。コウジはふっと鼻を鳴らして坂道をあがっていく。ぼくもふんっと鼻を鳴らし返す。母ちゃんには逆らえないくせに。ところで、

「どうして、そんな体なのにかえってきたのさ？」

ぼくはうしろをふりかえった。きゆうな坂道にさしかかり、松葉づえのハルばあはおくれた。転びそうなハルばあに、ショウちゃんがあわててかけよる。

「きまっとるがね。ここがわしの家じゃから」

きっぱりとハルばあはいった。

坂の下から、ぎろりと、にらみつけるような目に、ぼくは思わず立ち止まった。コウジもめんどくさそうにしているけど、坂のとちゅうでまっている。

ハルばあは汗をばたばたたらしながら、ぼくらにおいつくと、きいてちょといわんばかりにはなしだした。

「総合病院なんて、入院するもんでにゃあよ。治療費だけじゃのうて、なんやかんや、金をまきあげられるでよ」

ぼくらは苦笑いした。小銭の亡者のハルばあの口から、金をまきあげられるなんて。

「ごはんにも、ベッドにも、寝まきにも、金がかかるでよ」

「それって、治療費の中にふくまれないの？」

シヨウちゃんは親身になってはなしをきいている。

「ふくまれん。わしは寝まきをもっていくのをわすれたでよ、病院でお借りしたら金がかかるといわれてよう。いそいで脱いでお返ししたがね」

はっ？ ということは、すっぽんぽんでいたの？ いいや、考えるのはよそう。

「テレビを見るのにも、カードを買ってくれていうがね。こんなところに長いことおったら、金がないなってまうと思ってかえることにした」

全治三カ月のところを一カ月でもどってきた理由だ。さすがほんもののケチだ。

墓地のまえをとおりすぎて、さらに細道をすすむ。小さな畑つきの木造のボロ屋の屋根が見えてくる。その瞬間、ハルばあの顔に日のひかりがさしこんだ。

ぼくらはまたしても、ハルばあにまんまとはめられた。約一カ月のあいだ放置した家は、大掃除をしなければ、ザコの調理はもちろん、なんにもできそうもなかった。

玄関のひき戸をあけると、いきなり、カビ臭いにおいにおそわれた。くしゃみが三連発でて、四つ目を必死でこらえる。部屋の中を見まわすと、日焼けした畳の上でなにかうごいている。

「ひいいい！ クモだあ！」

コウジが情けない声をあげる。細い糸のようなクモが何匹もはいずっている。

「コウちゃん、だいじょうぶだ。家の中のクモは家を守ってくれているんだって、おばあちゃんがいったよ。殺しちゃダメだよ。踏まないように気をつけてね」

「こんなもん、踏むもんか」

昔から、コウジは虫が苦手だ。トノサマバッタもカマキリもこわくてさわれない。

「シヨウちゃん、早くなんとかしてくれよ。もう、のろいよ。オニィ、やっつけてくれよお！」

「けっ！ しるもんかって」

声にだすかわりに、背をむける。って、んっ？ 今、コウジのやつ、ぼくをオニィって呼ばなかった？ 考えるまもなく、ハルばあから指示がとぶ。

「流しはあっち。栓をしてザコを氷水につけておきゃあ。ほれ、ちゃちゃつと掃除してまうで」

そういうハルばあは部屋のすみの座椅子によりかかるようにして足を投げだした。

「やっと、かえってこれた」

ほこりっぽい空気もおかまいなしに、ハルばあは深呼吸する。ますます元気になる命令する。

「窓をみんなあけてちょう。ほうきでほこりをはきだしてから、雑巾で畳を水ぶきしてちょう」

ショウちゃんは、おばあちゃん、元気になってよかったねなんていいながら、ハルばあの指示に従っている。コウジは虫におびえていて、ハルばあに反抗する余裕はない。

「わかったよ、やりますよ」

ぼくも観念して流しにむかう。

台所は一段低い土間にあった。深い流しの穴に、黒いゴムの栓をしてバケツの中のザコをひっくり返す。一杯二杯。じいちゃんの入ってくれた氷は少し溶けている。

魚の種類は、ほとんどがアジ、イワシ、キスだけれど、小ぶりのタイも混じっている。おやっ？ アナゴがいる。しかも二匹だ。棒切れのように、細くてかわいい。

「まだ生きているじゃん。もってかえってペットにしようかな。それとも太らせて食おうかな」

ぼくがアナゴをおどかしていると、居間から、ハルばあの大声がとんできた。

「なにをもたもたしとる！」

「今、いくよ」

「氷がたらなんだら冷凍庫の霜をほうりこんだらええ。ああ、そうしてちょー！」

「なんなんだ」

結局、冷凍庫の掃除をしろということじゃないか。しかし、ザコが傷むのはこまる。

「冷凍庫の霜って、冷蔵庫はどこだ？ あれかな」

白というよりも黄ばんだ小さな冷蔵庫が土間のすみっこにおいてあった。冷蔵庫の上には海藻の入ったしわしわのビニール袋、その上には神棚がある。

神棚の中の日間賀島神社のお札とならぶように、火の用心の紙の札がはってあった。紙のふちはやぶれかけて、かさねたセロハンテープもめくれかかっている。

「火事か……」

昔、ハルばあの家が火事になったという、ぬまじいの言葉を思いだした。まだ、ぼくが生まれてくる前のはなしだ。今のところ、ぼくはほんものの火事を見たことない。

それでも、火災訓練には何度か参加した。内地とちがって、日間賀島には長い梯子のついた消防車はないし、訓練されている消防隊員もいない。



万が一、火事が起こったら出動するのは、消防団員だ。じいちゃんも父ちゃんも、消防団員の一人だ。住人で力をあわせてホースをひいて、火を消すしかない。

「こーりゃあ！ 冷凍庫の掃除はおわったきゃ？」

ハルばあの声がとおくからきこえる。

「ううん、あとちょっと」

とどくはずのない音量で答える。

冷凍庫のドアをひっばると、白い霜がぎしぎしと崩れ落ちた。ぼんやりと拾いあげて流しの中の水に投げ入れる。霜をはがして水に入れるをもくもくとくり返す。

指先が冷たくなって、じんじんしびれてきた。やりたくないことをやらされているのに、不思議と腹は立たない。作業をおえてもう一度、火の用心の札に目をやった。

下の方が折れ曲がっている。セロハンテープをもってきてあげればよかったと、なんとなく思った。

家の大掃除が終わったときには、とっくに昼を回っていた。ショウちゃんの腹がごおーっと盛大に鳴った。

「ああ、おなかすいたな」

「だねえ」

どてんと居間に座りこんだショウちゃんのとなりに、ばたんとぼくも寝ころぶ。

「ハンバーガー食いたい」

コウジのつぶやきに、ぼくの腹の虫がくうーっと答えた。やっぱり魚より肉が好きだ。でも、

「冷凍庫からっぽだった」

この言葉は、ハルばあにむけていった。

ハルばあはきれいになった部屋を見まわして、満足そうにうんうんとうなずいている。

「ちえっ、ただ働きかよ」

コウジはまだ虫を警戒しているようで、縁側の板のはしにちょこんと腰かけた。

「ジュースくらいないの」

ハルばあの家の間取りは、六畳の居間と仏間と土間、風呂とトイレ、こじんまりとしている。家具も少なく、金目の物は正治さんの仏壇くらいだ。

そういえばテレビもない。なにがたのしくて生きているのだろうという問いが、ぼくの頭の中にかんで、すぐ消えた。ハルばあは生きがいは金もうけだった。

「なにをゆうとる。食いもんなら、流しにいっぱいあるがね。あれを料理して食べよみゃあ」

ハルばあはうれしそうに、にまあと笑った。

「あれはダメ！」

「いいじゃん、スケっち」

ショウちゃんが、ぼくに目配せする。ああ、そうか。ハルばあは一カ月ほ

ど病院食だったから、日間賀島の魚を食べるのはひさしぶりなのだ。

ハルばあは観光客みたいに、うまい魚を思いうかべてそわそわしはじめた。すかさずショウちゃんは立ちあがって、ハルばあを支えてあげる。

「魚なら、天丼がいいな」

ぼくがいおうとしたことを、コウジがいった。すぐさま、ショウちゃんが賛成する。

「天丼いいね！」

「だけど、だれが料理するの？ 油であげるところか、まだ、さばいてない魚のまんまだよ」

ぼくも起きあがる。

「天丼は、魚のまんまだがね。うひゃひゃひゃ。わしが教えてやるで、あんたが作ってちょ」

ショウちゃんは笑ったけど、ぼくは笑えない。ハルばあが作れないのなら、料理するのはぼくしかない。なぜなら、ショウちゃんは刃物が苦手なのだ。

小学校の調理実習のとき、包丁をにぎるショウちゃんの手はかたかたとふるえていた。おまけに刃物がこわくて目を閉じてしまうので、先生がかわった。

「それじゃ準備しようぜ」

めずらしく、コウジが協力的なことをいった。しかし、ぼくはしっている。コウジは昆虫だけじゃなく、血も苦手なのだ。魚をさばけるわけがない。

あんのじょう、コウジは靴をはいて庭へでた。そのまま草むらをつっ切っ

ていなくなってしまう。天丼ができたころにもどってくるつもりだろう。

「あんにゃろう。どこになにを準備しにいったんだよ！」

「まあまあ、きっと、コウちゃんにも考えがあるんだよ」

ショウちゃんはぼくをなだめる。

ハルばあはショウちゃんを支えにして台所に移動した。今度はまるいすに腰かけて指示をだす。

「米は流しの下にある。三合でも四合でも炊いたらええ。炊飯器の使い方くらいわかるな？」

「うん、わかる」

ショウちゃんは米の袋とお釜をもつと、そそくさと表の水場に米をとぎにいった。

「どいつもこいつも……」

こうなったらもうやるしかない。

ぼくは台所に立った。まな板はプラスチックではなく、分厚い木の板だ。包丁の刃はずいぶん研いだのか一回り小さくて、先がすごくとがっている。

調理実習でならったことを思いだす。まな板を洗って、包丁を水でぬらす。流しの中のアジをつまんで、まな板にのせる。そしてどうするんだっけ？

「まずは、尾のつけねのゼイゴをそぎおとしゃあ。まな板に魚をならべてちゃちゃっとやったらええ」

「かんたんにいわないで」

「なんもむずかしいわ」

しかたなく、もう三匹アジをつまんで、まな板にならべた。そうだった。

ゼイゴというのは、このとげとげしたやつだ。魚をおさえて包丁の刃をあてる。

ゆっくりこそぎとるように包丁をうごかす。じょりじょり音を立ててゼイゴがとれる。一匹目は魚の身が多くついてしまったが、三匹目はましになった。

「なかなかどうして、スジがええ」

「まあね。これくらいはできるよ」

実は調理実習のときも、先生にほめられた。

「アジは背開きにするでよ。がつんと頭をおとしてまって、背びれにそって、包丁をうごかしてみい」

「はいはい」

「返事は一つでええわ」

ほーいと答えながら、ちょっと楽しくなってきた。背から包丁をさしこんで、内臓をとりだす。水洗いしてから、もう片方の背に刃を入れて中骨をこそぎおとす。

「へー、いいじゃん、いいじゃん」

自分でもほれほれする。ハルばあもうなった。

「ほー、キスもひらいてみるか？」

氷水から白っぽい魚をさがして取り出す。キスのひらき方は、うろこをとる以外、アジとさほど変わらなかった。しかし、小さくて細長いので作業しづらい。

次々と小魚をさばいていくうちにスピードもでてきた。ハルばあも、人は見かけによらんじゃあと、ほめ言葉のようなことをつぶやいて見守っている。

「米、オーケーだよ！」

外の水場から、ようやくショウちゃんがもどってきた。なにがオーケーだ、いつまで米をといでるんだか。

「うわあ、スケっち、じょうずだね。もしかして、家で魚をさばく練習でもしているの？」

「まさか、大げさだな」

大好きな野球ですら、練習という言葉をしきしてやったことはない。海岸のコンクリートの壁にボールをぶつける壁あても、楽しいからやっているのだ。

それに、ぼくはプロ野球選手になれると思ってない。あこがれるのと、仕事にするのとでは大ちがいだ。ほんとうは自分に目標がないことに気づいている。

でも、それをみとめてしまうと不安になる。具体的な夢をかたるのは、もう少しだけまってほしい。ところが、

「ぜったい料理人の素質があるよ」

ショウちゃんはつづけた。

「こんなに魚をさばくのがうまければ、プロ野球選手になれなくたって、つぶしがきくから安心だね」

「ツブシ？」

言葉のいやなひびきが、胸にひっかかった。

「あっ、ああ、ごめんね。ある職業がうまくいかなかったとき、べつの仕事につくことをいうんだよ。でも、まだ、野球選手になれないときまったわけじゃないもんね」

ショウちゃんはあわててあやまった。一瞬にして、楽しい気持ちは消えてしまった。胸のおくから、ざわざわ音を立てて不安がのどもとにこみあげる。「ごめん、このとおり、ごめんよ」

ショウちゃんは両手をあわせて頭をさげる。それだけ、ぼくの顔がこわばっていたのだろう。

「おしゃべりしとるひまがあったら、手をうごかしやあ。アナゴをさばいてみ」

ハルばあにせかさされ、氷水に手をつっこむ。ひよろっこいアナゴをつかんでまな板にのせると、くねくねとあばれだした。ショウちゃんは吹きだした。

笑えない。ぜんぜん笑えない。

ぼくは流し台に転がっていたキリをつかむと、力をこめてアナゴの頭につきさした。ガツン！ ショウちゃんは笑うのを止めた。すぐにアナゴはぐったりした。

アナゴをまっすぐにして背に包丁をさしこむ。ショウちゃんは目をそらす。包丁をうごかす手に力を入れすぎて、アナゴの身がところどころやぶけた。

それでもかまわずに、おなじ方法で二匹目のアナゴもさばきにかかる。手を止めたなら、氷をつかんで、ショウちゃんに投げつけてしまいそうだった。

できた。二匹目のアナゴはきれいにさばけた。深呼吸をして心をおちつかせる。

と、居間の方から、

「ねえ、天井できた？ まだあ？」

コウジののんきな声がした。

収まりかけたイライラがいきなり頂点になる。まな板に包丁をたたきつけ土間をかけあがる。居間にとびこんでコウジに怒りをぶつけるつもりが、

「え……」

ぼくは空気を飲みこんだ。

テーブルの上には、ランチョンマットがわりの緑色のソテツの葉がしかれている。サイダーの空き瓶には、白とピンクのコスモスが一本ずつ飾られている。

ソテツの葉のすみに一個ずつおかれている淡い紫のイワガキの貝がらは、はしおきだろうか。まるで母ちゃんの趣味のインテリア雑誌の切りぬきのようだ。

言葉をなくして立ちつくしていると、

「ま、いちおう退院祝いだからさ」

てれくさそうに、コウジは鼻の下をこすった。

コウジは料理から逃げたのではなく、自分のとくいな分野でみんなに協力しようとしていたのだ。自分で考えて自分で作る。ぼくにはまねできそうもない。

「うおお！ コウちゃん、さすがだね。ポロ屋がレストランになっちゃった！」

ショウちゃんも居間にきた。

「ボロ屋だとか、なんかゆうたか？」

ハルはあの声かとんでくる。

「い、いってないよ、そんなこと！ おばあちゃん、油はどこにあるの？ おれが天ぷらを揚げるよ！」

ショウちゃんが台所にすっとんでいく。

頭の中がぼうっとしていた。目のやり場にこまって、ぼくも台所にもどった。氷水に手をつっこんで魚をつかむ。まな板の上に乗せて包丁をにぎる。

アジ、キス、イワシ、手をもくもくとうごかして、魚のひらきを作っていく。

今、ぼくのやれることはこれしかない。このまま一夜干しにすれば土産物になるのかな？ 金をかせげるのかな？ そんなことを少しだけ考えたけど、不安は消えなかった。

## 5、コンパスの軸

ハルばあの退院から一週間が経った。

ハルばあの家には、島の住人が毎日こうたいで泊まりこんで、ハルばあの身のまわりの世話をした。母ちゃんもあたりまえというふうにでかけていった。

ぼくらはといえば、けっきょく、ザコでもかせげなかった。一夜干しはできあがったけど、干物を入れるナイロン袋も、ナイロン袋を入れる保冷バックも、氷のかわりの保冷剤もない。

「ナイロン袋に入っていないと、観光客は買うてくれん。近ごろじゃ袋の上にハエが一匹とまっただけで、商品をこうかんしてくれとってくるだよ」

一夜干しができあがってから、そんなことも知らんのかと、ハルばあは教えてくれた。

「ああ、そうだよ。最初から、あんぱんは袋に入っているわけじゃないもんね」

ショウちゃんは干物を網にならべる作業をがんばったのに、のんきに笑っていた。なにもかも、ぼくはめんどくさくなった。ざわざわする不安を投げすてたい。

「売れないのなら、いらないよ。あげる、みんなあげる」

「ええんか？」

ハルばあは、わるいにゃあとかなんとかいっていたけれど、わかれぎわに念をおすのをわすれなかった。

「まっとるでえ、巾着袋ひとつ、いっぺえにしてくれよ！」

そして、週末をむかえたのに、ぼくらは売り物が無い。巾着袋の中身はかわるはずもなく、かわったといえば、ぼくのショウちゃんに対する気持ちだ。

この一週間、学校の休み時間、ぼくはさそわれても、ショウちゃんたちと野球をしなかった。かといって、コウジのいる田中たちのグループに入る気もしない。

窓際の自分の席について、ぼんやりと空を見ていた。月曜日から金曜日までみごとに晴れて、この週末は曇りのち雨だ。今朝、ショウちゃんが家にきた。

「スケッチ、いいことを思いついたんだ」

おはようもいわないで、ショウちゃんはめずらしく興奮気味につづけた。

「貝がらでペンダントを作って売ろうよ」

ぼくの心にはまだ、ツブシという三文字がつきささったままなのに、ショウちゃんは笑顔だ。ペンダントって、子どもじゃあるまいし売れるわけがない。

「雨が降りだす前に、いってらっしゃい」

母ちゃんにどんっと背中を押されなければ、腹が痛いといっただけのことわっていたらう。

「これ見てよ！ 貝の中身が入ってるよ」

ショウちゃんはテトラポッドをよじ登って、わざわざぼくに見せにきた。

白に紫の絵の貝をちらしたような親指ほどの貝は、どこにでもあるイワガキだ。

「あっそ……」

心の中でつぶやく。

ショウちゃんがぼくに気を使っていることが、ますますぼくをいらつかせる。ショウちゃんからはなれるように、消波ブロックのすきまに手をさしこむ。

イワガキの貝がらは、海岸にたくさん落ちている。われてない白い花びらのような貝がらをつまむ。見なれているはずなのに、ペンダントだと思うちがって見える。

「意外ときれいだなあ……」

「えっ？ なんかいった？」

やっとぼくが返事をしたのだと思ったのか、ショウちゃんの声は明るくなった。

「これ、食べられるかな？」

ショウちゃんはまだ身入りのイワガキを捨てていない。原始人みたいに、小さなイワガキに大きな石をぶつけて、中身を取りだそうとしている。かっこわるい。

グシャッ！

でかい音とともに、イワガキはこっぴみじんになった。貝がらも中身もいっしょになって、岩のおもてにはりついてしまった。食べられたものじゃない。

おまけに、ショウちゃんは石で指をうちつけて、なみだ目になっている。おい、だいじょうぶかよと、ものすごくてきとうに声をかけたら、ショウちゃんににらまれた。

「おれ、そんなにわるいこといった？」

きゅうに、ショウちゃんが真顔になった。やっぱりツブシという言葉をおぼえていた。

「べつに……」

ぼくは三個いっぺんに貝がらをひろって、海藻のはりついた一個を海にすてた。さっさと貝がらをあつめて家にかえりたい。だれもない二階の部屋で漫画を読みたい。

「なあ、おい」

ショウちゃんはぼくの返事をまっているのか、テトラポットの上で仁王立ちになっている。その姿に、またしてもめんどくさいと感じてしまう。

カン、コン、コン

数メートルさきのバケツに、貝がらを投げ入れる。われながらナイスコントロールだ。

これまでも、ぼくらは数えきれないほどケンカした。原因はおぼえてないけど、解決方法はいつも同じだ。砂浜でプロレスをして三秒間、上にのった方が勝ち。

すばしっこいぼくと、体重にものをいわせるショウちゃん。ケンカの勝敗は五分五分だ。

けっきょくは、二人とも砂まみれになって、お互いの姿がおかしくて、気がつくときいごには笑っていた。けれども、今回のケンカは種類がちがう。

ぼくはショウちゃんにとびかかりたいほど、腹を立てているわけじゃない。このもやもやした気持ちはなんだろう？ ショウちゃんから目をそらす。

「これくらいでいいんじゃないの……」

バケツの半分くらい貝がらがたまった。ショウちゃんはでっかいため息をついた。

「かえろうよ」

「そうしょか」

いつもとちがう気持ちなのは、ぼくだけじゃないみたいだ。ショウちゃんほうなずくと、テトラポットの上を移動しはじめた。ぼくは壁をつたった。

海岸沿いの塀にはいあがり、空を見あげる。トンビはいない。ショウちゃんはテトラポットの上でもたもたしている。さすがに置いてきぼりにするのは気がひける。

と、正午を知らせるサイレンが島中にひびいた。高い波がうちよせてブロックにぶつかる。白い水しぶきがあがり、ショウちゃんはテトラポットの上でぐらついた。

「あぶない！」

とっさに、ぼくは手をだした。ショウちゃんはぼくの手をつかむと、なんとか体勢を立て直した。

「ありがとう」

またもや、ショウちゃんはなみだ目だ。おまけに、つかんだ手をはなしてくれない。ぼくは塀の上でしゃがんだまま、めいっぱい右手をのばしている。

「お礼なんかいいから、こっち側に移動して壁をつたえよ。その方が安全だから」

ショウちゃんは、ありがとうと繰り返して、その場でわんわん泣きはじめた。

「泣くなよお」

泣きたいのは、ぼくの方だ。将来の目標はないし、約束の金はかせげないし、のばしている腕はしびれてきた。これで雨でも降りだしたらサイアクだ。と、

「お二人さーん、報告があるんだ。なんで手をつないでるのさ。気色わりいなあ」

ひょっこりコウジがあらわれた。

「来月の文化の日に、小学校でチャリティーバザーをひらくことになったんだぜ」

めずらしくコウジの声がはずんでいる。

「チャリティーって、寄付するんだろう？ まさか、ハルばあの治療費なのか？」

ぼくは少しとまどった。巾着袋一つ、小銭でいっぱいになると約束したからにはやりとげたい。

「みんなはちがうよ。診療所に寄付して設備を充実させるんだっていったぜ！」



コウジは早口で続ける。

「それとは別に、ハルばあにわたす金をかせいでいって、許可をもらったのさ」

「やるじゃん」

コウジはぼくとショウちゃんの知らないところで、いろいろ交渉していたようだ。

「ところで、貝がらはあつまった？」

ぼくの足もとのバケツを、コウジはのぞきこんだ。一つ二つ手にとって、わるくないじゃんつつぶやく。あれっ、もしかしてペンダントのアイデアは……、

「ごめんね、スケっち、おれが思いついたんじゃないくて、コウちゃんのアイデアを借りたんだ」

ショウちゃんがうつむく。きっと、ぼくとのなかなおりのきっかけをさがしていたのだろう。コウジはアイデアをばくられたことなど気にもかけていない。

「オニィは意外と手さきが器用だから、ペンダントを作るのもうまいと思うぜ」

「はいっ？」

声がひっくり返った。

「意外ってなんだよ……」

とはいったものの、鼻の下がこそばゆい。

「天井、うまかったなあ」

ショウちゃんはうっとりつつぶやくと、口もとをぬぐう。ハルばあの退院祝いの天井は、我ながらよくできた。コウジもうまそうにペろりと食べてくれた。

それにしても、コウジのハイテンションの理由はなんだろう。チャリティーバザーだけが、理由じゃないはずだ。指をぼきぼき鳴らしておちつきがない。

「コウちゃん、やる気まんまんだねえ。ペンダント作りを手伝ってくれるの？」

ショウちゃんが甘えた声でたのむと、

「いやだね。巾着袋一つくらい、ショウちゃんとオニィだけでなんとかなるよ」

コウジはつっぱねた。やっぱりコウジはコウジのまま。まあいいや、ショウちゃんにむきなおる。

「とりあえず家にかえろうよ。昼飯を食ってから、ペンダントを作ってみよう」

ぼくらは歩きだした。

「までよ、まだはなしはおわってない。つぼを掘り出すことになったんだよ！」

コウジがぼくらを呼び止める。

「はあー？ ツボって？」

ぼくとショウちゃんは首をかしげて、コウジを見つめた。コウジはにやにや笑っている。

「ハルばあが床下に金を入れたつぼを埋めてるっていう、あのうわさ、ほん

とうだったのさ」

「え、えーっ、それじゃあ」

「床下にお宝があるのか？」

コウジは真顔でうなずく。それから小声になった。

「なんでもハルばあがつぼを掘り出してほしいって、ぬまじいに相談して、ぬまじいが消防団長にはなして、消防団長の坪井さんが町内会長の鈴木さんにいって」

ということは、

「つぼのことを、みんな知っているの？」

いちおう小声でたずねる。

「ああ、たぶん」

コウジはささやく。ショウちゃんは吹きだした。

「ったく、それなら、顔をつきあわせて、ひそひそばなしをすることないだろうが」

いつのまにか、曇り空が晴れてきた。

「つぼ掘り、ぼくらも参加していいの？」

「もちろんだぜ、いこう！」

コウジははなしおえると、腕を空につきあげた。

週末の土曜日。

朝から、ハルばあのぼろ屋に、島の人たちがあつまっている。みんな手にスコップをもっている。園芸用の小さなものから、工事用の大きな三角シャベルまである。

ハルばあは四十年以上のあいだ、こつこつと小銭をつぼに入れては、満タンになると床下に埋めていたそう。入院中に掘り出す決意をしたという。

「なんで、またきゅうに？」

作業にとりかかる前にぬまじいがたずねると、ハルばあはてれくさそうに答えた。

「息子らが郵便局の保険にわしを入れておいてくれたで、病院の金を払えたんだわ。通帳も出てきたことだし、この際、郵便局に金を預かってもらおうと思うて」

ぼくとコウジとショウちゃんは大人たちにまじって、ぼろ屋にあがりこんでいる。

「なるほど、その方がええ」

ぬまじいがやるかと手を叩く。

「みなさん、なんのおかまいもできにゃあが、よろしゅうおたのみもうします」

ハルばあが頭をさげた。

ぼくらは一瞬、ぎょっとした。あのハルばあが、だれかに頭をさげるなんて。

「どっか、わるいんじゃないの」

「足の骨はくっついたけど……」

「頭の骨が折れてたりしてなあ」

ぼくらが顔を見あわせてうなずきあうと、ハルばあがきろっとにらみつけ

た。

「あんたらにゃきっちり働いてもらわにゃ。巾着袋を返してもらってないでよ」

「くっ……」

にやりと笑うハルばあは、いつもの小銭の亡者の顔だ。なぜか少し安心した。

「そんなことよりつぼだよ、つぼ。じいちゃん、早く床下のお宝を掘り出そう」

ぼくの金じゃないのにわくわくしている。

じいちゃんたちは手際よく、畳を外していく。居間の畳はふかふかしていて、工具をさしこむとかんたんに外れる。外された畳はリレーで裏庭に干される。

こういうとき、島の人たちの呼吸はぴったりあう。それにしてもほこりまみれの床下だ。ハルばあは土間の方からもぐりこんでいたというのだからすごい。

「よーし、みんな掘ってくれ！」

といわれても、ぼくは床下におりることをためらった。かびくさい土だ。コウジはムカデの姿に早くもギブアップだ。ショウちゃんは長靴をはいておりた。

「ここ掘れわんわん、わんわん」

「お、おう」

ぼくもとびおりる。運動靴の下の土は、じめっとしていてやわらかい。スコップで土をすくいバケツに入れる。いっぱいになったバケツをコウジにわたす。

二杯目のバケツにとりかかったときだ。スコップの先が、かちんとかたい物に当たった。

「ショウちゃん、なんかある！」

土をはらうと、赤茶色のつぼの口があらわれた。スコップをさしこみ、つぼを抜きとる。

「やった、一個目、見つけた！」

つぼはずっしりと重たい。

「こいつは、タコつぼじゃないか。いやはや、ずいぶん古い形をしているのう」

じいちゃんが目を細める。別の場所を掘っていた漁師たちがやってくる。みんな、へえとかほおとかつぶやきながら、タコつぼの形に見入っている。

つぼは赤茶色の植木鉢のような形をしている。じいちゃんによると、タコつぼ漁に使うつぼの形は、時代とともに少しずつ工夫されて変化しているそう。

「使わなくなったタコつぼの再利用とはおそれいったわい」

でも、今はそんなことよりも、

「中身を出してみたい？」

ぼくとショウちゃんのもとに、コウジもやってくる。じいちゃんの許可をもらい、つぼをひっくり返す。土とかたまりになり硬貨がどしゃんと落っこ

ちた。

「おおおお！」

ぼくらは声をあげた。

「すげえ、お宝ざくざく！」

硬貨は土にまみれて何色かわからないけれど、金のかたまりだと思わずごい。これが、床一面に埋まっているなんて。ハルばあが大金持ちに思えてきた。

ぼくは土をおとしながら大きなザルに硬貨を入れる。コウジが外の水場からひいてきたホースで、いっきに水をかける。ショウちゃんは米とぎみたいに硬貨を洗う。

「五十円玉？ いや五円玉だな。うおっ、百円玉があった」

「ショウちゃんかわってよ」

ぼくの担当が一番地味だ。しかも、油断していると、土の中にいるハサミ虫にかまれる。

「もうちょっとやらせてよ」

「ちえーっ！」

「とりあいなんぞしなくてもまだまだありそうじゃ。ほれ」

じいちゃんたちが掘り出したタコつぼをもってくる。中には、原型をとどめてないつぼもあった。

「金を洗うなんてはじめて」

コウジは自分の担当に満足しているようだ。ホースの先を親指でつぶして、水をかける。

「硬貨ってきれいだね。今度こそ五十円玉だ。へえ、菊の花の模様だったんだね」

ショウちゃんが五十円玉をつまんで、青空にかかげた。たしかに銀色の菊の花が見える。

「これも、ペンダントにできそうじゃない？」

思わず、ぼくはつぶやいた。

「スケっち、五十円玉にひもをとおして、いったいいくらで売るつもりなのさ？」

「六十円で！」

いきおいで答える。

「つまり五十円玉は五十円の価値だから、ひも一本を十円で売ろうっていうんだね？」

だれも買わないんじゃないといたげに、ショウちゃんは両手をひろげる。

「ジョーダンだよ」

ぼくらのやりとりに、コウジがくすっと笑う。ハサミ虫を投げてやろうとしたその瞬間、

ビュッ、ピシャーッ！

先手をうたれて、ホースで水をかけられた。頭から、ぼくとショウちゃんは水を浴びる。

「うひゃあーっ！」

「気持ちいいね！」

ぼくらが騒いでいると、

「なにを遊んどる」

ハルばあがやってきた。手がすべったと、コウジはそしらぬ顔で口笛を吹く。

きれいになった硬貨は、魚を干すための網にならべた。けっきょく、発掘作業は昼までつづいて、大漁のときみたいに、網がずらりと裏庭にしきつめられた。

ぼくは母ちゃんたちの差し入れの天むすを食べながら、太陽の日差しをうけてきらきらかがやく硬貨をながめる。きいたばかりの大人たちの会話を思いだす。

最初、ハルばあは息子たちを内地の学校へいかせるために小銭をあつめだしたという。そして、二度と火事で燃えないようにつぼに入れて土の中に埋めた。

息子たちが独立したあとは、ハルばあは自分の夢のために硬貨をあつめて、つぼを埋めつづけたそうだ。四十年前の火事で失ったものを取りもどすために。

「金って不思議だ。あれも買える、これも買える。ペロペロくんのソーダ味も、コーラ味も買える。小銭もつもれば、小料理屋だって買えちゃうんだな」

ショウちゃんがうなずく。コウジはだまっている。

とおくない未来、ぼくらは金をかせがないといけない。生きるために。夢をかなえるために。そのことは、ちょっとステキなことのように思えてきた。

壁あてはいつも夜にやる。

場所は、家をぬけだして徒歩三分、西港のタコのモニュメントが見守るサンセットビーチだ。砂浜にある監視台のコンクリートの壁にボールをあてる。

的が大きくないのでコントロールよく、しっかりあてることが大切だ。的をそらすとうしろの監視台の階段にぶちあたり、ボールが自分の方へもどってこない。

バシッ！

よし、七球連続の成功だ。次で最高記録の更新だ。大きくふりかぶったとき、

「よおーっ！　せいがでるなあ」

ふらっと、父ちゃんのがのそきにきた。

「うわわっ！」

ボールは大きき的をそれて、砂浜を転がっていく。

「まだまだ集中力がたりんぞ！」

父ちゃんは、ぼくにちかづいてくる。左手にグローブ、右手に缶ビールをもっている。そういえば、父ちゃんとキャッチボールをするのはひさしぶりだ。

ぼくらは海辺の外灯の下に移動した。今夜の月はでっかい。白いボールのりんかくが見える。父ちゃんはビールを飲み干すと、さあこいとグローブをかまえた。

「酔っぱらっているくせに、ボールとれるのかよ」

「コウスケのへなちょこ球くらい、楽勝だとも！」

「いったな！」

ぼくは力をこめて右腕をふった。ボールはきれいに回転して低めにとんでいく。

「おととと」

なぜか父ちゃんとはびあがって、股間からボールをうしろにそらした。ダメだこりゃ。酔っぱらってなくても、おせじにも野球がじょうずだとはいえないのに。

「わりい、わりい」

父ちゃんがボールを投げかえす。ぼくはジャンプして、頭の上にとんできたボールをキャッチする。

「ところで、ハルばあの小銭、全部でいくらになったの？ 郵便局で計算してもらったんだよね？」

ずっと、ぼくは気になっていた。

発掘作業の翌日、きれいになった硬貨は、じいちゃんたちの手で日間賀島の郵便局へもちこまれた。ネコ車にのせて運んだという小銭の総額を教えてもらっていない。

「さーなー」

父ちゃんは話をきいているだろうにごまかすつもりだ。

どうして、大人たちは子どもに金のお話をするのをいやがるのだろう。世の中には、きれいな金とズルをしてかせいだきたない金があるからだろうか。

ぼくらはちゃんとわかっている。ハルばあの貯めた金は、汗水ながしてかせいだきれいな金だ。ちょっと、いや、かなり強引なやり方ではあったけれど。

「ゼロが四個くらい？」

「えーとー」

「ゼロが五個くらい？」

「んーあー」

「ゼロが六個くらい？」

しつこくたずねると、父ちゃんのかたまった。

「ん？ ゼロ六個だと、なんぼになるんだ？」

父ちゃんは首をひねったまま、ぼくが投げたボールを、うげっとたいこ腹でうけとめた。どうやら、ゼロが六個は、安井サイクルにはなじみのない数字のようだ。

「もう、小料理屋のやねくらい買えるんじゃないか。女手ひとつでたいしたもんだよなあ」

父ちゃんはボールを投げて返す。

「ハルさん、ぺらぺらの通帳を見ておどろいていたぞ。まあ、小銭の山が紙切れに化けたのだからむりもないか」

めずらしくストライクがつづく。

「おれもサラリーマンのとき、はじめての給料が銀行ふりこみだったんだよ。ちょっぴり味気なく感じたもんだ」

「ふーん。そういや、母ちゃんにきいてみた」

ぼくがいうと、なんのことだと、父ちゃんは投げようとしたボールをとめ

た。

「前に教えてくれなかったじゃん。父ちゃんと母ちゃん、どっちのかせぎが  
いいのこだよ」

「そ、それで？」

父ちゃんは意味もなくボールをこねはじめた。

「なんだかよくわからないんだけどさ、母ちゃんは、今、とてもしあわせだ  
ってさ」

「ほ、ほへっ？」

「だから何度きいても、母ちゃんは、わたしはとてもしあわせよとしか答え  
てくれないんだってば」

と、突然、ピューン！

ノーコントロールのスピードボールがとんできた。ボールはぼくの頭上を  
とびこえて海におちた。早く見つけないと、ゴムボールは波にさらわれてし  
まう。

「まったくどこ投げてるんだよ」

ぼくは運動靴をはいたまま、じゃぶじゃぶ海に入った。もう夜の海は冷た  
い。

「すまん、すまん」

父ちゃんもあわててやってくる。

月あかりの下、ボールをさがす。石、貝がら、砂、海水、波しぶきにまじ  
りボールは見つからない。すべての物が少しずつうごいている。かんぺきに  
止まっている物は一つもない。

「ボールに手足があったらなあ」

酔っぱらっているせいか、ぽつんと、父ちゃんがとんちんかんなことをつ  
ぶやいた。

「はあ？ 手足？」

「コウスケ、おまえには手足が生えているから、海にとびこんでも自分で  
どってこれるだろうよ」

「まあ、そうだね」

「ボールにも手足がによきによき生えていたら、こんなときさがさなくても  
かえってこれるだろう」

父ちゃんは真顔でいうと、すばやくかがんだ。

「あったぞ！」

とくいげにボールをかかげた瞬間、ひっくり返って海の中に尻もちをつい  
た。

「まったく、なにやってんだか」

ぼくは腕をのばして、笑いつづける酔っ払いの手をつかんで立たせてやっ  
た。

チャリティーバザー当日。

空は雲ひとつなく晴れた。ぼくらは日間賀小学校のグラウンドに集合した。  
校門には、日間賀島へようこそその横断幕と、バザー会場の看板がかかげられ  
ている。

「ショウちゃん、これ見て。ペンダントに工夫してみたんだよ。売れるかな

あ？」

ぼくはリュックから商品を取り出す。イワガキの貝がらにひもとおしたペンダントに、母ちゃんのとうめいなマニキュアをぬってみたのだ。

「うわあ、スケッチはほんとうに手先が器用だね。売れるよ、ぜったいに売れる」

「サンキュー」

ショウちゃんにほめられて、ぼくの不安はやわらいだ。実は、ペンダントに手をくわえているさいちゅう、よけいなことをしてないか心配だった。

じいちゃんからわけてもらったレング色の細いひもは、もとは漁に使う網だ。白い貝がらとよくにあう。マニキュアのおかげで紫色もつやつやしている。

「それと、ペンダントの種類も増やしてみたんだ。全部で三種類にしたんだ」

まずは、ひもに貝がらを一個とおしたシンプルなデザイン。これはショウちゃんといっしょに作った。

ぼくが考えだしたのは、大きめの貝がらの左右に小ぶりの貝がらをあわせたペンダントだ。合計三個の貝がらを使っているのではなやかに見える。

そして、一本だけごうかなネックレスを作ってみた。たくさんの貝がらで、ぐるりとひもを一周させた。小ぶりの貝がらをふんだんに使った。

「これは力作だね。いくらで売りたい？」

「うーんと」

ショウちゃんにたずねられて、ぼくは腕組みをした。作るのに夢中で値段まで考えていなかった。

ネックレスを手にして考える。千円？ いや、札だからというわけじゃないけれど高い気がする。それなら、八百円？ なんかちゅうとはんぱに高い。

例えば、ぼくにとって一万円の価値のある宝でも、客にとって一円の値打ちしかない場合もある。もちろんその逆も。一人でぶつくさなやんでいると、「高すぎるのはダメだし、だからといって、安ければいいってもんじゃないよ」

ショウちゃんはよくわからないことをいった。

「十円のポテチはうさんくさいだろう？」

「たしかに」

すごく賞味期限が切れているような気がする。

「あのさ、ショウちゃんに任せていい？ だって、ショウちゃんやコウジはぼくより商売にくわしいからさ」

もう一人の商売人のコウジは、グラウンドのわずかな日かげの体育倉庫の前に、ビニールシートをひろげている。いったい、なにを売るつもりなのだろう？

「それじゃあ、これで、どう？」

ショウちゃんが画用紙にマジックで書きこんでいく。

貝がらどれでも一個十円。

シングルペンダント五十円。

トリプルペンダント百円。

ネックレス五百円。



「ご、五百円？ 高くないか？」

「だいじょうぶ。このネックレスには五百円の魅力がある。それに一本しかないのがミソなんだよ」

ショウちゃんはあごをこすった。

「ネックレスを五百円にすることで、お客さんはトリプル、シングルペンダントを安く感じるだろう？ 貝がらにはさらにお買い得感をえられるんだ」

「なるほど……」

ショウちゃんは自信たっぷりに笑う。

「よし、そうときまったら、安い順番にならべよう。貝はくずれそうに山もりにね」

ショウちゃんは長机の上に持参したバケツをひっくり返した。あれっ？ イワガキのほかにも貝がらがある。ショウちゃんも一人で用意していたのだ。

マキガイ、タカラガイ、まだらもようの二枚貝に、なんとアワビとサザエのからまである。もちろん中身は入ってないけど、どの貝がらもぴかぴかにみがいてある。

どれも、島でとれた宝だ。

ここは、ぼくらの宝島だ。

午前十時の開店まもなく、客がおしよせた。

西港の目と鼻の先の安井サイクルで、父ちゃんが手作りチラシをくばっているおかげだろう。ほとんどが日間賀島に着いたばかりの観光客だ。

バザー会場には、ぼくらの貝がら屋、ネコ車ばあちゃんたちの干物屋、母ちゃんたちの日用雑貨のリサイクル屋、じいちゃんたち漁師のタコつぼ屋もならんだ。

バザーの売上の一部は、日間賀島診療所へ寄付するのがルールだけど、やっぱりネコ車ばあちゃんたちの迫力はすごい。運動場をネコ車が走りまわっている。

「おれたちも声をだそうよ」

「お、おうよ！」

ぼくらの目標は、巾着袋一つだ。

「らっしゅいらっしゅい！」

客をよびこむショウちゃんの声はすっかり板についている。ぼくも腹から声をだす。

「い、いらっしゅいませ！」

いえた！ 一度、大きな声をだすと、はずかしさは空にふっとんできえた。

そして、その瞬間はやってきた。

「これください」

幼稚園くらいの女の子が貝がらを一つ手にとって、ぼくに十円玉をさしだしたのだ。

「ま、まいどあり」

ぼくも手をだすと、女の子は十円玉をのせてくれた。硬貨はほんのりあたたかい。巾着袋に落とすと、ちりんと音がした。もう一度ききたくて耳元でゆらす。

ちやりん、ちやりん！

「スケっち、ハルばあみたいだよ」

「だ、だってよお」

うれしさをかくせない。一つ売れると、二つ三つとつづけざまに貝がらは売れた。そして、待望のペンダントも売れた。巾着袋は少しずつ重たくなっていく。

「コウちゃんの店も繁盛してるね」

体育倉庫の前には長い行列ができています。ならんでいるのは観光客ではなく、主に島人たちだ。その先には、ハサミを手にしたコウジと、教室のイスがある。

「コウジ、美容院をやってるの？」

「うん。さっき、うちのおふくろがカットしてもらったって。値段はお客さんが決めていいんだって」

これまたすごい自信だ。

「おばさん、いくらにしたって？」

「三百円だってさ」

「はあー、すげえ」

コウジが一番商売しようずだ。しかも、自分の大好きなことをしてちゃんと金をかせいでいる。あいつならきっと、内地でもうまくやっていくにちがいない。

ぼくは島を出ることについて考えるのを、前ほどいやだとは思わなくなった。いつかその日がきたとしても、ぼくのかえってくる故郷はかわらない。

ここ、日間賀島だ。

いつのまにか、ざわざわという音もきえていた。耳をすませばきこえるのは波の音だ。いつだって、ぼくの心の中にある島。ぼくは日間賀島が大好きだ。

それでも、不安な夜は、ぼくをコンパスの軸にして、ぐるりと円を描くんだ。地図のまん中にぼくがいて、そこから世界はひろがっている。

「あ、次のお客さん、ハルばあだ」

美容院のいすに、ハルばあが腰かけた。

「コウちゃん、どうするのかなあ」

「たしかに、ハルばあの天然ちりちりパーマ頭なんて、短くする必要ないよね」

ぼくらは笑いをこらえて、なりゆきを見まもる。

「腕の見せどころだぜ！」

コウジの口元が、そんなふうにごうごうとした気がした。

霧吹きで髪の毛をしめらせたあと、コウジはちりちり頭をすきはじめる。大嫌いなはずのハルばあに顔をちかづけて、まわりこみながらハサミをうごかす。

すごい。コウジは本気だ。

「コウちゃん、やるね！」

「ああ」

ぼくも負けてはいられない。

午前中でペンダントは売り切れた。のこるは十円の貝がらと、ショウちゃ

んが五百円という高値をつけたネックレスだけだ。やっぱり高すぎたのだろうか。

と、そこに、

「貝がらとは、こりゃあまた、うみゃーことを考えたがね」

カットをおえて、ござっぱりしたハルばあがやってきた。まだ診療所から借りた杖をついているけど、ぬまじいがあと少しでギプスを外せるだろうといていた。

ぼくとショウちゃんは顔を見あわせる。

声をあわせて、

「じゃじゃーん！」

「約束の巾着袋一つ、ぜにいっぱいだよ」

はちきれそうな巾着袋を、ハルばあにさしだした。

一瞬、ハルばあはきょとんとした。それから、巾着をかた手でつかむと、まるで拝むように、おでこの前にかかげた。気のせいか巾着袋をふところにしまう手はぎこちない。

そのまま、だまって立ち去ろうとするハルばあに、

「ねえ、まってよ」

ぼくは声をかけていた。

いいことを思いついた。机のこちらから腕をのばして、ネックレスをハルばあの首にかけてあげる。日焼けした肌に、白い貝がらがよくにあう。

ハルばあは目を丸くした。しわしわの指で貝をなでる。

「売れのこりより、五百円の方がええわ」

ハルばあは口では強がったけど、ネックレスを外そうとしなかった。ハルばあは運動場を見まわして、体育倉庫に目をやって、再び胸もとに視線をおとした。

ハルばあの体の線がふるえだした。なみだと鼻水と笑い声を、しお風がつつみこむ。ぼくは空を見あげた。ああ、あっちいなあ。太陽はまだまだやる気まんまん。